

## 研修会報告

# 令和5年 埼玉県助産師会 ブラッシュアップ研修会

### 助産所部会 「お産の真髄」 「妊婦の出血リスク・診断・対応について（産科出血）」

助産師の役割は、新たな命の誕生に立ち会い、母子の健康と幸福を守ることにあります。

緊急時の対応は、助産師の重要なスキルの一つです。特に、日本における妊産婦死亡の原因として多いのは産科危機的出血です。出産や周産期には予期せぬ状況が発生する可能性があります。助産師はどこで働いていたとしても対応する必要があり、的確な判断と迅速な行動を取る能力が求められます。

助産所部会では、春日部市立医療センターの山本樹生先生に「妊婦の出血リスク・診断・対応について」をご講義いただきました。研修を通じて、緊急時のシナリオ訓練や新たな治療法の習得に取り組むことは、安全なケア提供のために不可欠であることを再認識しました。

助産師はまた、将来の課題に備える必要があります。もう一つのテーマとして、助産院もりあね院長の田口眞弓助産師に「お産の真髄」の講義をしていただきました。技術と医療の進歩に伴い、助産師の役割も変化・多様化しています。予防医学やカウンセリング技術の習得も重要です。助産師の努力と多職種連携によって母子の死亡率が減少し、健康な出産経験が促進されることで、家族の健康と社会の発展に貢献します。

助産師は、女性たちに包括的なケアを提供することで、これから産まれてくる子どもたちの健康と幸福にも寄与します。助産師たちの専門知識とスキルの向上は、人類全体の未来にも影響を与えます。ブラッシュアップ研修が最新の情報と諸先輩方から連綿と受け継がれる助産技術を提供し、臨床的なスキルを向上させる機会となることを期待します。



山本 樹生 先生



田口 眞弓 先生

### 保健指導部会 「プレコンセプションケア～最初の一歩～」

「プレコンセプションケア～最初の一歩～」では、CoReめろ®埼玉チームリーダーで、さくら助産院院長の櫻井裕子先生に、若い世代を中心に組み込まれている、将来の妊娠を考えながら健康に向き合う「プレコン」についてご講義いただきました。基礎知識をはじめ、櫻井先生の経験や活動の中から、実際の対象者さん達の様子をたくさん聞くことができ、プレコンの具体的なイメージを膨らませることが出来たと思います。また櫻井先生の優しさと、真っ直ぐな想いが伝わってくる内容で、私も聴講後は「自分もプレコンに携わってみたい!」と、胸が熱くなりました。きっとみなさんのプレコン最初の一歩も、後押ししていただけたのではないかと思います。



櫻井 裕子 先生

(鴻巣・上尾地区 伊藤 朋子)

### 保健指導部会 「発達障害の基礎知識」

育児は予定通りにいかないことが多く、特に母親は多重タスクへの対応が必要になります。育児困難から子育てへの自信喪失・イライラ・虐待の可能性もあります。発達障害により産後になって困難さを感じるケースもあると考えられます。今回理解を深めることができたのが、DCD（発達性協調運動障害）です。微細・粗大運動に困難が生じ、転びやすかったり道具をうまく使えず、周りには「不器用」と捉えられ自尊心が低下しやすいです。失敗体験から負のループに落ち込まずに成功体験を積めるような配慮が必要となります。その方法として①見える化（見通し等）②クールダウンできる場所・方法の提示③TEACCHプログラム等があり発達障害のある子どもと親の支援にも活用したいです。



斉藤 西 先生

(川口地区 嶋添 典子)

### 勤務助産師部会 「産科混合病棟における助産力」 「NICUにおける栄養と母乳バンク 現在・過去・未来」

2023年5月総会後の部会集会で産科病棟勤務の多くの会員から、産科混合病棟におけるケアの実際と助産師の能力について意見がありました。中には「他科の患者さんが転棟してきて、産婦を抱えているのにそちらのケアに追われている。本来の助産師の仕事がしたい。」と訴える助産師もいました。近年の少子化に伴う産科混合病棟の増加は、2016年の日本看護協会の調査で、婦人科・他科との混合病棟は77.4%であり、2023年4月には「産科混合病棟では、他科患者ケアのために産婦へのケアの中断が正常分娩の16.2%で発生している」と報告がありました。そこで、埼玉県内の院内助産、助産師外来を開設している総合周産期母子センター（さいたま赤十字病院・中島明子氏）、地域周産期母子センター（埼玉医科大学病院・山口次子氏）、近県の地域周産期センター（国際医療福祉大学病院・櫛田恵津子氏）に、施設で働く助産師の活動と声、助産師の能力をより発揮するにはどうするのかを講演していただきました。そこでは「院内助産施設で産褥入院や産後ケアを行う」「他科患者のケアは女性一生の患者のケアと捉え、自身のスキルアップと、看護師と協働する」などが挙げられました。又、水野克己氏（昭和大学医学部小児科学教室主任教授）に、母乳について講演していただきました。母乳バンクの母乳はドナーミルク（DMH）と呼ばれ、ドナー登録された母乳は、ハイリスク新生児の腸内細菌叢を確立させるヒト由来の医療用品である（WHO）と言われ、有益であることが大変よく理解できました。

(鴻巣・上尾地区 高森 妙子)

### 安全対策委員会 「助産師が行う産後ケア事業：安全管理・ケアのあり方・今後の展望」

令和5年度埼玉県助産師会ブラッシュアップ研修会は、島田真理恵先生によるオンデマンド研修にて行われました。テーマは、「助産師が行う産後ケア事業：安全管理・ケアのあり方・今後の展望」でした。産後ケア事業における安全管理では、現行産後ケア事業ガイドラインの安全にかかわる記載を再度確認しました。また、事業受託時に行うべき安全管理においては、自治体との契約内容の確認、賠償責任保険の加入、自治体との安全管理マニュアル作成・共有、事故防止に対する意識の共有体制づくり、緊急時対応フロー、産後ケア事業を行う助産師に必要な知識など重要な内容ばかりでした。



島田 真理恵 先生

特に印象的だったのは、児を預かることで発生するリスクについてです。児を預かることは、児の安全に対する責任のみが生じるのではなく、複数の利用者がある場合、児の預かりによって公平なケアの提供ができない、児の誤認や連れ去り、乳幼児間での感染症伝播など改めて考えさせられる内容でした。

産後ケアのあり方・産後ケアの今後の展望に関しても充実した内容で、利用促進・利便性向上、質の向上も求められますが、精神疾患急性期などのハイリスク母子や医療的ケア児等の育児をする家族への対応は産後ケア事業では限界があること、産後ケア事業を請け負う事業者の多くが赤字で運営されていること、法制化された持続可能な事業としていくには施設側の赤字経営解消は必須であること、など課題を改めて痛感した研修でした。

(朝霞地区 伊東 優子)